～日本語弁論大会 下関市長賞受賞者研修旅行記～

この旅行記は、2004年10月31日に韓国・釜山広域市で開催された日本語弁論大会（主催：在釜山日本国総領事館、下関市など後援）で下関市長賞を受賞した学生が、2005年2月9日から14日まで下関市への研修旅行を体験し、その感想をまとめたものです。

研修旅行に関する2名の学生の体験記ならびに本市職員の同行体験記をご紹介します。

１．２月１４日明け方５時　下関を思い出しながら

釜慶大学校日語日文学科　金祉諶（キム・ジヘ）

2月9日に釜山を発ち、再び釜山に戻ってこようとしている。釜山沖に浮かんでいる船、「はまゆう」。その船の中で明け方5時に目が覚めた。最初は客室の全体の電気をつけたが、すぐ外側の電気だけ消す。ヒウンさんが寝ている。昨夜食事した後、まるで倒れそうになって先に眠ってしまったので、ヒウンさんがいつ頃眠ったのかわからない。足下には、旅立つ時三つだった鞄が六つに増えている。ヒウンさんにはすまないが、かさかさ音をたてながら、その鞄を三つに積んでみる。より大きい鞄に、積み重ねたり挟み込んだりする。5時から20分位が過ぎた。じっと座って、思い出のつまった鞄を下ろし、写真を取り出してみる。

ホームステイ先の家族がいる。優しいおじさん。奥さんで、私と好みがピッタリ合った愛さん。賢い5歳ハルカ、かわいい2歳リョウタロウ。初対面の日を覚えている。初対面はいつも気まずい。あの日もそうだった。しかしあの日がなかったら分からなかっただろう。どんなにいい家族であったかを、どんなにいい友達であったかを。初対面の気まずさは、次の日、小倉城の前で陰踏み遊びをしてなくなった。2歳、5歳、子供たちの言葉くらい大丈夫だろうと思っていたが、リョウタロウの言葉は私を200％緊張させた。おそらく一番難しい日本語であろう。朝8時30分位になると居間におりてもいいのだろうか、暗くなるといつ部屋に上がればいいのか、まごついた記憶。早めにおりて遅めに上がったが、失礼ではなかったのだろうか？

よさこいチームがいる。「よさこいチームの人達は日本人ではない気がする」と、古川さんはおっしゃっていた。明るくて、明るくて、あの人たちはあんなに明るいのに、私はどうしてこんなに落ち着いているのか、と考えさせられる。すぐ真剣な私を取り戻したが、よさこいチームと一緒に過ごした時間は、「私らしくない私」でいるのも悪くない、ということを教えてくれた。踊りながら笑ってみる。いや、自然に笑いが出る。順番さえしっかり覚えていないくせに、人の動作をまねばかりしているくせに、笑う。私の心まで明るくなる気分だ。

古川さんがいる。一昨日焼鳥屋でおっしゃった。「弁論大会で発表した人の中で、日本で焼き鳥をもてなしてもらった経験を話した人がいたので、今度下関に来る人たちには焼き鳥をもてなそう」と、あの時のスピーチを聞きながら考えたそうだ。そうそう、覚えている。緊張していた時だったから記憶が確かではないが、なまりで話すおじさんの情味が感じられた、といった内容だった。古川さんは私たちになまりを言わない情味のあるおじさんだ。必ずしも鳥だけを焼くわけではないといろいろなものを注文して、種々の「焼き鳥」を見せてくださった古川さん。私を驚かせたのは、玉ねぎをきってそのまま焼き出した焼き鳥だった。「渦巻き模様」だ！

下ろしたものを積み重ねたり挟み込んだりしてみる。今よりも頭が大きくなったら困るのに、悩み悩んで頭がさらに大きくなった気分だ。

日本語を習って良かったと思った。久しぶりに浮かぶ思いだ。去年弁論大会のため本当に苦労したが、「人間万事塞翁が馬」。私にこのようなプレゼントをあげるために苦しませたのか。彼らと結んだ縁が長い間続いていって欲しい。深くお互いを理解し合って、長い間お互いを見守っていて欲しい。日本社会、日本文化、日本歴史が、友だちの社会、友だちの文化、友だちの歴史に変わっていく。日本のことが、自然に「勉強（学問）」でなく、「楽しく、興味をひく話」に変わっていく。ふと、2月9日に旅立った時の私ではないことに気付いた。

「ジヘさん起きていたの。」ヒウンさんである。旅行中いつも大きな力になってくれたヒウンさん。「ヒウンさん、忘れられない時間だったよね。だよね。」と、心のなかで言ってみる。返事は聞かなくてもわかっているから。

２．下関へ旅行に行ってきて…

釜山外国語大学校日本語学科　成喜恩（ソン・ヒウン）

私は昨年10月に行われた日本語弁論大会で下関市長賞を受賞し、副賞として下関への旅行に招かれました。とてもドキドキしながら、関釜フェリーに乗りました。

今回の旅行は、下関で歴史的に有名なお寺や神社など、下関市を旅行する時に必ず寄る場所を観光する、という日程。さらにそれに加えて、フグを刺身にすること、着物を着ること、よさこい踊りを習うこと、ホームステイなど、いろいろな日本の文化を体験することも織り込まれていました。

下関市は日本の歴史で重要な役割をしている都市でした。ですから、観光したほとんどの場所が歴史と関係のあるところでした。いろいろな歴史に関する説明を聞きながら観光したのですが、韓国で日本の歴史の授業の時に勉強した内容が出てきて、理解しやすかったです。ですから、「もし、私が日本の歴史について全然わからなかったら、どうなっていたのか？」とも考えさせられました。実は、大学で日本の歴史について勉強することになった時、「これを今、本当に勉強する必要があるのか？」と考えましたが、今になって考えてみると、その授業を受けたことが大変幸運だったと思いました。

私は、2日間、日本の家庭でホームステイをする機会をいただきました。私は日本人と一緒に生活をするのが初めてでしたから、すごく嬉しかったのですが、一方で、私の日本語は通じるのだろうか？という不安もありました。

ホームステイ先の家。可愛い2階建てで、庭には韓国の「ジンドッゲ」という犬に似た犬もいたお陰で、そんな不安もなくなりました。家に入って家族に挨拶をした後、家の中を見てびっくり！キッチンや、お手洗いなど、家の中の壁のあちこちに「冬のソナタ」のポスターが貼ってあるではありませんか。また、食事をする時は「冬のソナタ」の主題曲を聴きながら食べました。日本では「冬のソナタ」が人気があるそうだという噂は聞いていましたが、どんなものか想像がつかなかったので、とてもびっくりしました。

また、いつも本だけで勉強してきた日本の家庭の生活を体験することができて、とてもいい経験になりました。特に私が一番気になったことは、お風呂を使う習慣の違いです。日本ではお風呂に入るとき、一度水を入れたら、その水で家族全部が使うということを聞いていたのですが、実際どうなのか、とても興味がありました。他の人が使った水を次の人が使ったら、気持ちが悪くなるのではないかと思って聞いてみたら、「日本の人たちは気にしないよ。」と答えてくれました。私は少し慌てましたが、「これが日本の文化なんだ」と実感したのを覚えています。

今回の下関の旅行は、今までの私の日本への旅行とはまるっきり違うものでした。今までの日本旅行は、韓国の友人と一緒に韓国語で話しながらの観光でしたが、今回は日本の人たちの中で、一緒に生活をしながら、日本という国を本からでなく、私自身の眼で見ながら、手にとって感じながら、日本の歴史を、そして文化を感じることができました。また、日本という国を、わかっていたつもりでいましたが、きちんと覚えていなかった内容を、自分の眼で見て、体験し、感じることができた後は、きちんと覚えることができたことは、やっぱり「百聞は一見に如かず」だということを実感させられました。

外国語～日本語を勉強している私にとって、外国語を勉強することは、ただその国の人と会話をすることではなくて、その国の文化を、歴史をよくわからなければならない、ということを痛切に感じました

今回の旅行で、私は絶対に忘れない思い出と大切な人たちができて、すごく嬉しいです。これは一生忘れられません。

また、下関に行きたいです。

３．ミニ通信使２００５年版

釜山広域市派遣職員　古川　力

この行事の目的は、日本語弁論大会で下関市長賞を受賞した二人の学生を下関市に招待することで、下関（日本）を肌で感じてもらい、下関（日本）を知ってもらうこと、ひいては、我が町下関の（日本の）ファンになってもらうことである。船中2泊、現地では3泊4日という極めて短い期間の中でいかに効率的にプログラムを作るかが腕の見せ所だ。他方、韓国、特に釜山市との長い歴史を持つ下関市民にとっても、二人の学生を受け入れて現在の韓国の若者の考え方を学ぶチャンスである。さしずめ朝鮮通信使ならぬ「ミニ通信使」といったところであろうか。

下関市長賞受賞者が決まると、早速準備である。プログラムを充実させるために、11月以降、何度かミーティングを行い、計画を練った。「日本を体験したい」という彼女達の希望を実現するため、少々忙しいスケジュールにはなったが、ホームステイ、ふく（フグ）料理体験、振袖の着付け、韓国でも披露された「よさこい踊り」の体験と、日本を充分に味わい、そして再び「行ってみたくなる、知り合った人たちに会ってみたくなる」プログラムを作成した。 出発日となった2月9日は旧正月。韓国ではソルラルと言って、正式にはこの日をもって新年を迎える。下関では「ふくの日」。素晴らしい巡りあわせだ。下関は日本のふく（河豚）料理の本場であり、ふくはこのシーズンが一番美味しいとされている。この時期に下関を訪問することにした。

二人の学生に下関のいろいろなところを見てもらいながら、外国人には少し難しい歴史の説明もした。下関は武士の時代が始まった地、そして武士の時代が終わった地。下関名物の上臈人形の工房を見て、赤間神宮の前を流れる海を見て、実際にふく料理を調理し、食べる。さぞ難しかったであろうが、彼女達は下関という町がどんな街なのかをしっかりと理解してくれたと信じている。とにかく、訪問先のそれぞれで、ものを見る眼が違っていた。限られた時間の中でできるだけ吸収して帰りたい、という意欲が感じられた。彼女達のきらきらと輝く眼を見ていて、なによりも自分自身が一番うれしかった。

受け入れ側の下関市はどうだったろう。彼女達、すなわち生の「韓流」に衝撃を受けていたようであった。ホストファミリーの2家族はといえば、予定に入れていなかった最終日まで付きっ切りで同行してくれた。この2家族の皆さんをはじめ、着付け教室の先生方、よさこい踊りチームである馬関奇兵隊のメンバーそれぞれがボランティアで彼女達の受け入れに尽力してくれたことはわが町の財産だ。フェリーの出発ロビーでは涙も見えた。関係してくださったみんなが見送りにまで来てくれたのは、「ミニ通信使」が成功した証であろう。

帰りのフェリーの中で、撮影した写真を見ながら、二人が私に話してくれた。「これからアルバイトをしてお金を貯めて、今年の夏休みに再び二人で下関に行くと約束しました。」それぞれの訪問先でたくさんの人達に出会い、今後も連絡を取り続けたいといった話が出たのは大きな収穫だ。一方、今回面識ができた下関の知人が釜山を訪れる際、「みんなが釜山に来たら私たちが釜山を説明するんですね」とすでに心構えが出来上がっていたのには驚いた。

こうして再び二人が下関を訪れ、今回二人に会った下関の面々が、二人に会いに釜山に遊びに来る…これらが実現したら、なんと素晴らしいことだろう。「近くて遠い国」から1日も早く「近くて近い」国へ。その関係は市民レベルではもう完成しつつある…そのように実感した。今回の行事の目的は、今後時間をかけながら達成されるものと確信している。

釜山へ戻るフェリーの中で酒を飲みながら、ふと、初めて自分が韓国の地を踏んだ7年前の衝撃と、初めて海外旅行をした15年前のことを思い出していた。

韓国にやってきてまもなく1年。生活には慣れたがまだわからないことも多い。慣れたがために日頃気付かずにいることも多くなってきた。疑問を生じつつも、つい忙しいと、聞かずに流してしまうこともある。赴任中に韓国の、釜山のできるだけのことを吸収して故郷に戻れるよう、今一度初心にかえろう。2人の学生が私に教えてくれたことであった。

最後に、この場をお借りいたしまして、今回の研修生受け入れにご協力くださいました関係の皆様方に、心からお礼申し上げます。